

平成 22 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520647

研究課題名 (和文) 近代アメリカの女流史家と出版文化の変容

研究課題名 (英文) Female Historians and the Transformation of Print Culture
in Modern America

研究代表者

肥後本 芳男 (HIGOMOTO YOSHIO)

同志社大学・言語文化教育研究センター・教授

研究者番号：00247793

研究成果の概要 (和文)：本研究は、アメリカ革命からアンテベラム期を射程におき、新共和国における印刷文化とジェンダー関係の変容過程を分析した。革命期を境におびただしい数の印刷物を通して合衆国では人種とジェンダーによる重層的な公共圏が生まれ、参政権から排除された中産階層の女性の多くは、教育や編集・出版の分野で重要な役割を担うようになった。本研究はこれらの女性たちの言動が「女性の領域」を擁護する一方で、19世紀前半には慈愛と美德に基づく「自由な帝国」の膨張を文化的側面から支えたことを明らかにした。

研究成果の概要 (英文)： Focusing on the decades between the American Revolution and the antebellum period, this study analyzes how the transformation of print culture influenced gender relations and vice versa. In the aftermath of the Revolution a flood of printed material helped to shape a modern public sphere that was multilayered and often more strictly restricted by race and gender. Many middle-class women, who were excluded from suffrage, began to play prominent roles in education and the publishing industry. This study reveals that most of their language and behaviors associated with female benevolence and virtue not only endorsed the concept of “women’s sphere” but helped spread the idea of expanding the “Empire of Liberty” across the country.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：南北アメリカ史、出版文化、ナショナリズム、共和主義、女性史

1. 研究開始当初の背景

私はもともとアメリカ革命および革命が建国期の社会文化の形成に及ぼした影響

に強い関心をもっていた。対英抵抗運動からアメリカ革命を経て新共和国では新しい公共圏が出現し、新たな公共性の概念の台頭と

ともに新共和国アメリカの文化が形成されていった。近代的な公共圏の創出、公共概念の変容、その文化的影響に関して西洋史や社会学では近年研究者の大きな関心を引いてきた。近代市民社会の基本的単位としての「市民」や市民社会のあり様と公共の概念は密接な関係を持つからである。とりわけ、1990年代以降ヨーロッパ近代史のなかで形成されてきた解釈枠組みである「公共圏」理論をめぐって、それがアメリカにそのまま適用可能なのか、また合衆国独自の公共圏の有様があるとすれば、その特質は果たしてどのようなものなのか、などが議論の対象にされてきている。このような研究動向に鑑み、本研究は、アメリカ革命から19世紀半ばまでの印刷文化の変容とそれへの女性の役割を中心に新共和国の社会変容と文化の形成過程を印刷文化とジェンダーの視点から再解釈することを目指した。

2. 研究の目的

ドイツの社会哲学者ユルゲン・ハーバマスの著作に触発されて、18世紀の印刷文化の急速な拡大と啓蒙思想の強い影響下で出現したとされる「近代的公共圏」の概念は、近年西洋史研究のみならず、メディア研究やコミュニケーション学などさまざまな分野にも適用されて大きなインパクトを与えてきた。翻ってアメリカ革命史の研究動向を見れば、主に文化史の領域を専門とする歴史家によって1990年代から21世紀の初めにかけて新しい公共圏の台頭とアメリカ革命の勃発を関連づけようとする意欲的な事例研究が提出されてきている。

近代的な公共圏の形成期とアメリカ革命やフランス革命の時代が時期的に重なり合っている事実は決して偶然ではない。当時現れてきた公共性の概念と公共圏に関する研究は、まさに近代の特質とその問題点を再考するうえで最重要なテーマの一つである。この時代を公共性の転換および公共圏の概念といった大きな解釈枠組みのなかで捉えなおすことは、アメリカ革命の本質とその衝撃を再解釈する有効な手段になろう。

このような問題関心のもと、ヨーロッパ史における白人知識人および中産階層を中心に語られてきた公共圏の概念は、アメリカ史の文脈でどの程度適用可能なのか、革命・建国期のアメリカで新しい公共の概念が形成されたとすれば、新共和国の公共圏はいかなる形態をとり、どのような特質や問題を備えていたのかを本研究では中心に探究した。具体的には、旧世界の身分制に基づく政治文化や社会と比べてアメリカ社会をより複雑にしていると思われる人種・ジェンダー・共和主義の観点から印刷文化が公共圏の形成に果たした影響を歴史的に解明することを

目的とした。

3. 研究の方法

研究方法としては、次の3つのアプローチから18世紀から19世紀前半までの公共圏の出現と変容過程を歴史的コンテクストに位置づけることを目指した。1) ヨーロッパ、特にイギリスやフランスなどにおける近代的公共圏の創出過程と合衆国のそれを比較史的に考察した。2) ジェンダーの観点からいくつかの重要な女性史家および出版者の言動に焦点をあて、伝記的なアプローチを取ることにより公共圏創出の諸理論を具体的な事例の中で検証した。3) 建国初期に盛んになった社会改革運動に見られるような運動生成史的視点から、印刷物が社会運動の生成と広がりにも果たした役割を分析した。とりわけ、本研究では奴隷制解放運動と信仰復興運動に焦点を当て、せめぎあう複数の言説圏の出現とアメリカの近代的な公共圏の特質を考察した。

4. 研究成果

印刷文化と公共圏のかかわりを考察する研究は、1990年代から欧米の学界ではすでに多くの先行研究の蓄積がある。とりわけ、アメリカ社会史および政治史の分野において18世紀半ばから19世紀前半にかけての印刷文化の発達とアメリカ革命にともなう公権力の変容過程をめぐる議論は、70年代以降社会史の隆盛とともに政治パンフレットを通しての反英論争や民衆へのプロパガンダの事例研究を中心に進められてきた。しかしながら、それらの諸研究はもっぱらイギリスおよびアメリカ植民地人の白人エリート層を対象にしたものであり、実際政治冊子の著者も読み手も教養ある限定された白人エリート層に限られていたといえる。

今日アメリカ革命・建国期の研究は、アフリカ系アメリカ人や多様なエスニック集団、女性、先住民などを視野に入れたより包括的な研究が進んできている。本研究も公共圏の変容を軸に、女性やアフリカ系アメリカ人などのグループがそれぞれ当時急増しはじめた新聞・雑誌などの印刷物をどのように活用し、公論の形成にいかなるメッセージを伝えたのかを検証することを主要な目標においた。端的に言えば本研究の視角は、女流史家や編集者の言動を中心にアメリカ建国期からアンテベラム期にかけての印刷文化の発達と公共圏の変容過程の関係をジェンダー関係史的な側面から解明することを目指したのであった。

具体的には、女性が新しい公共圏でどのような役割を担い、それがアメリカ文化の形成にいかなる影響を与えたのかを探るために次の3つの視角から実証研究をおこなった。

第1に、革命・建国期の著名な女流史家マーシー・ウォレン（1728-1814）の『アメリカ革命史』執筆に関する歴史的コンテクストとその文化的意義を問直すことで、女性が歴史を記述しそれを公にすることの意味を分析した。その結果、ウォレンの『アメリカ革命史』（1805）が従来の歴史叙述の体裁を踏襲しながらも、女性独自の視点からアメリカ革命の歴史を描いていること、また彼女が実名でその本格的な歴史書を著すことを決意する過程で、イギリスの著名な女性史家キャサリン・マコーレイから大きな感化を受けていたこと、さらに女性の知識人としてジェンダーの壁を乗り越えようとしつつも、彼女は当時優勢だった男女の補完的な性的役割に異議申し立てをするまでには至らなかったことなどが明らかになった。保守的なニューイングランドに生まれ育った知的な女性の地理的な限界もウォレンの生涯から看取できるものの、腐敗したイギリスと決別することで新大陸に新しい共和制を創造するという歴史的使命を女性たちが共有し、それがアンテベラム期の歴史書の基調になったことを考えれば、ウォレンの『アメリカ革命史』には従来ともすれば白人男性中心の革命史の叙述に埋もれた著作として過小な評価鹿与えられなかったが、文化史的には重要な著作として再評価されるべきであろう。

第2に、19世紀初頭に活躍した女流史家ハナ・アダムズ（1751-1831）や女子教育者兼歴史教科書執筆者エマ・ウィラード（1787-1870）などの言動を丹念に追うことで彼女らの著作活動を出版文化史の文脈に位置づけた。とりわけ、ウィラードは19世紀初頭の女性知識人の間では注目に値する人物である。建国期間もないアメリカ共和国において女子教育の重要性をいち早く公の場で訴えるとともに、1821年に独自の教育カリキュラムに基づくトロイ女学校（NY）を創設した。当時全米の注目を集めたこの女学校は、実際19世紀半ばまでの女性権利運動を担う逸材の多くを輩出し、アンテベラム期の女性の公的進出に少なからぬ貢献をしたのであった。とりわけ重要なことは、エマ・ウィラードらの教育活動や著作は単に公共における女性の領域の確保にとどまらなかったことである。本研究は、彼女らの著作が学校教科書の歴史書の執筆を通して広く年少者たちに合衆国存続のための共和主義の重要性を喚起させ、アンテベラム期の若いアメリカ共和国への愛国心を若い世代の間に育む上で中心的な役割を担ったことを明らかにした。

第3に、出版業や書籍流通といった経済史・ジャーナリズムの発達史の観点から、アンテベラム期における印刷技術の発達、交通網の整備、「コミュニケーション革命」に焦

点を当てつつ印刷文化の変容過程を体系的に把握しようと試みた。具体的には、1812年戦争以降領土の膨張にともない急激に進展した「市場革命」のなかで女性向けの雑誌が台頭してくる。とりわけ、著名な『ゴディズ・レディズ・ブック』の編集者として成功したサラ・ヘイル（1788-1879）などの女性編集者や作家たちがいかなる人的・社会的ネットワークでつながり、当時の印刷文化の形成にどのような役割を果たしたのか、また彼女らは合衆国の領土が西へ急速に拡大し、市場革命やコミュニケーション革命が浸透しつつある急激な変化の時代に、読者にいかなるメッセージを送ったのかを考察した。具体的には、次のようなことが次第に明らかになってきた。当時の第二次大覚醒運動の広がりと呼応するかのようになり、キリスト教への帰依と女性の美德が賛美され、他方で市場革命の波に洗われている職場や公的領域に対する平穏な「家庭」の概念が構築された。そして「家庭」を支える女性の役割が強調され、それにふさわしい規範が求められるようになった。このような「家庭的であること（ドメスティシティ）」の価値観は、アンテベラム期の女性たちの現実生活がいかに過酷なものであったにせよ、まさに当時急増し始めていた女性雑誌や宗教冊子のなかで理想化され、私的な領域として家庭の美德が読者に繰り返され、説かれることで、広くアメリカ社会に浸透することになった。さらに、ヘイルやウィラードのような初期の女性史家や作家にとって、西への領土の拡大は合衆国の共和主義の礎であり、神の恩寵を受けた平和で美德溢れる共和国の「家庭」が私的な領域を超えて広く北米大陸に拡大することは、他者へのキリスト教的慈愛の精神と結びついて、ごく自然のように思われたのである。本研究は、女性史家や編集者たちがこのような「慈愛の帝国（Benevolent Empire）」の観念を創造する上で、決定的な役割を果たしていたことを検証した。アメリカ帝国の膨張を擁護する言説の構築には女性も少なからず貢献したのである。しかしながら、このような文化史的なアプローチは、考察の対象が多様であると同時に、関連する一次史料もさまざまな歴史協会や古文書館に広範囲に分散されているために、夏季休暇に限定された短期のリサーチではまとまった大きな成果を挙げにくいことも実感された。

最後に、建国初期からアンテベラム期にかけての時代には、北部を中心に男性に交じって多くの女性たちも多様な奴隷制廃止運動に参加し印刷物を利用して奴隷制問題をめぐる公論を形成していった事実が如実に示すように、合衆国の公共圏の形成過程とその特質に関してはアボリショニストの戦略と彼らの言動について、印刷文化の視点から

改めて分析しなおす必要性を感じている。今回の研究プロジェクトでは、奴隷制廃止運動まで十分に射程に入れる時間的余裕があったが、このテーマについて問題提起的な論文の執筆を現在準備中であり、できる限り早期に学術雑誌に投稿する予定である。これらの未消化の問題を含めて、今後の喫緊の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

- ① 肥後本芳男、「アンテベラム期の印刷文化とジェンダー」、第37回中・四国アメリカ学会年次大会、2009年11月28日、安田女子大学
- ② 肥後本芳男、“The Free and the Unfree in the Slaveholding Republic” (American Freedom: Past and Present)、東京大学アジア太平洋地域研究センター シンポジウム、2009年3月20日、東京大学
- ③ 肥後本芳男、「3つの革命とジェファソンの『自由の帝国』(シンポジウムA)、第5回日本アメリカ史学会年次大会、2008年9月21日、東洋学園大学
- ④ 肥後本芳男、「建国期・ジャクソニアン期からのアプローチ」(19世紀研究の視点)、第41回アメリカ学会年次大会、2007年6月10日、立教大学

[図書] (計3件)

- ① 肥後本芳男、他、彩流社、『アメリカの愛国心とアイデンティティー自由の国の記憶・ジェンダー・人種』、2009年10月15日、213頁(41-64頁)。
- ② 肥後本芳男、他、彩流社、『北米の小さな博物館2』、2009年3月31日、285頁(8-15頁)。
- ③ 肥後本芳男、他、ミネルヴァ書房、『権力と暴力』、2007年6月30日、304頁(39-61頁)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

肥後本 芳男 (HIGOMOTO YOSHIO)
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：00247793

(2) 研究分担者
無し

(3) 連携研究者
無し